

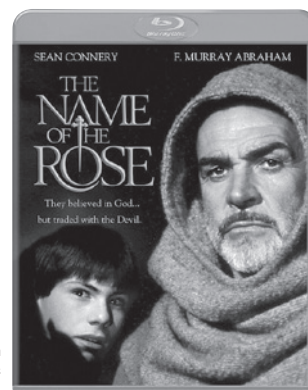
『薔薇の名前』

1986年／仏・伊・西独合作／ジャン＝ジャック・アノー監督作品

枯れし薔薇はただ名のみ虚しく残る

会員 宮川 光治 (20期)

『薔薇の名前』
ブルーレイ ¥2,381 + 税
DVD 特別版 ¥1,429 + 税
ワーナー・ブラザーズ ホーム
エンターテインメント
© 1986 Constantin Film
Produktion. All rights
reserved.



原作はイタリア記号論学者ウンベルト・エーコの1980年の小説。世界の読書界に衝撃を与えた。日本では映画の公開後に90年東京創元社から河島英昭訳で刊行され、雑誌などでその年の、後には戦後海外ミステリーのベストワンに選ばれている。

映画的に脚色されてはいるが、成功している。時は1327年、場所は北イタリアの山上にあるカソリック僧院。キリスト教社会最大の図書館を擁しているが、そこは迷宮世界。この僧院に教皇側と皇帝側の高名な僧たちが続々と集まってくる。聖と俗、正統と異端を巡る論争に決着をつける会議が開かれるのである。ところが、この僧院の写本僧が墜落死する事件が発生した。悪魔の仕業か。そこに、ショーン・コネリー演ずる僧バスカヴィルのウィリアムが到着する。その名はシャーロック・ホームズと「オッカムの剃刀」で有名なオッカムのウィリアムを連想させる。僧院長は密かに事件の解明を依頼する。伴った弟子はクリスチャン・レター演ずる見習修道士メルクのアドゾ。この若者がワトソン役なのだが、貧しい農民の娘との愛の物語が切ない。

映画は数十年後、人生も終わりに近い老僧アドゾが回想するという形で進む。黙示録の七日間に沿うように次々と発生する殺人事件。どうやら、アリストテレスの「笑い」に関する一冊の本が関係している。犯人は誰で動機はなにか。

監督はデビュー作でアカデミー賞最優秀外国映画賞を受賞し、これが三作目。後年の「セブン・イヤーズ・イン・チベット」も素晴らしい。

ショーン・コネリーはジェームズ・ボンド役以降低迷の感があったが、ここでは、ロジャー・ペーコンやオッカムのような中世の知性人になりきり、鋭い知性ゆえに本に執着するという「ささやかな罪」を犯す人物を彫り上げている。

映画の後半に登場する敵役の異端審問官ベルナル・ギーは実在の人物で、異端審問の技法に関する著述を残している。演ずるF・マレー・エイブラハムは84年「アマデウス」のサリエリ役でアカデミー賞主演男優賞を受賞した名優である。彼の苛烈な異端審問の場面は見どころの一つ。

読んでから観るか、観てから読むか。私は87年日本公開時に観て後に読むことになったのだが、難解な原作も愉しむことができた。この映画ほど西欧中世世界を見事に再現した作品はない。アナル派の歴史学者たちが美術界の協力を得て、僧院のセット、壁の彫刻、写本室等々、そして衣服・食器類・壺の細部に至るまで完璧なレプリカ世界を作り上げている。セリフは英語だが、中世人の言葉づかいの再現に努めたという。何度観ても飽きることがなく、新しい発見がある。この映画を機に、しばらく私はこの時代に囚われ、「中世の秋」に耽り、原作でさらに嵌った。

93年春、故橋元四郎平先生が最高裁判事を退官された際に、この映画と原作をお勧めし、そのことが縁でご夫妻と二度にわたり中世ロマネスク建築を巡る長い旅を妻と子どもと一緒にすることとなった。その思い出もあり、観返すと、老僧アドゾのごとく寂寞たる思いに襲われるのである。